

都市景観の汚染源

美しくなれない都市に関する因果考察

エネルギー・文化研究所 濱 恵介

都市が美しいか美しくないかは、多分に主観的なものである。見えている対象は同じでも感じ取り方は人により様々だろう。しかし都市の現状を見るにつけ、都市景観について真剣に考える必要があると痛感する。ここではありふれた都市空間について視覚的な美醜の判断、特に汚くしている要因について論じたい。

私の目には我が国の都市は多くの部分は乱雑で、都市美の対象とするには程遠いように見える。戦後の復興、高度経済成長の過程を通じ、嘗々と都市の建設を行って来た現時点での到達点である。膨大な投資が行われた。都市インフラの整備率などで都市整備の状況が評価される。多くの建築も素晴らしい成果を上げた。しかし総体としてどんな都市ストックを築き得たのか。都市の全体像は都市景観が最も雄弁に物語る。その姿に情けなさや苛立ちを感じるのは私だけではあるまい。

本論では、現実の姿を見つめることから、景観を構成する諸要素とそれらを形作った背景・制度などの検証を試みる。

都市の美しさとは

本題に入る前に、都市景観、都市美とは何かについて若干の考察をしておこう。

都市の美しさは視覚的評価だけではない。美しさには心地よさによって裏付けされるのが普通で、それは視覚以外の感覚を交えた心理的要素である。また、「ちり一つ落ちていない」というような清潔さ、衛生的評価も含まれる。

ここで論ずる景観は主として視覚による評価で、目に入る景色を立体的な映像として捉え感知することが基本である。視点を移動させ、動きと記憶のプロセスで形成される心象「イメージ」は主として景観の産物である。

仮に都市景観を 美しい、普通の、醜い(みっともない)ものに三分してみる。その境界線はややあいまいで、個々人の感性に左右される可能性が高い。ともあれ、は美観とも表現できしばしば絵画や写真、絵葉書などの材料となる。まさに絵になるような”picturesque”と言い表せる。美しさ故に経済・文化価値を生じ得るのだ。一方、は感激を呼ばない代わりに不快感を与えることもない。ただ漠とした都市の印象には残る。問題なのは である。これはそこに暮らす人々、訪れる人々にマイナスのイメージを植え付ける。ゴミゴミした乱雑な街と言う印象から、「住みたくない、早く立ち去りたい」など心理的な側面から、都市や地域にじわじわとダメージを与える可能性がある。少なくとも旅行者を引付けることはない。

都市を描いた画家ではユトリロやピサロなどが著名だ。都市景観に美を感じたからに他ならない。彼ら印象派に影響を及ぼしたと言われる浮世絵の中で、安藤広重の江戸名所百景なども都市景観の美を表現したものである。現代の都市画家は何を、どのように描くのだろうか。

ヨーロッパへ旅すると、私は訪ねた都市の絵葉書をよく買う。それぞれの街並みを表現した絵葉書が、駅の売店、タバコ屋、雑貨店など何処でも気軽に手に入る。旅先からの便りに使うばかりでなく、記録用としても有効で、実に豊富なメッセージが込められている。その都市が誇る建築、景観、モニュメントなどが最も優れた条件下で写し取られているからだ。

ところが日本ではあまり絵葉書を売っていない。大阪を代表する鉄道の玄関、JR 大阪駅で絵葉書を買おうとした。いろいろ尋ね歩いたが、あったのは吉本喜劇のギャグ・ポストカードのみで、都市大阪を表現した絵葉書はついに見つからなかった。単に売れないから、それとも誇るに足る景色が少ないからだろうか。そして大阪を訪れる人々はどんな印象を持って帰るのだろうか。

街並みを観察すれば

机上の議論を続けるより外へ出て街を歩いてみよう。写真 1~3 は、都心部と郊外の大通りから少し入ったごくありふれた街並みである。種々雑多な建築と看板、そして電柱と電線が目飛び込む。日本人にとってはありふれた景色だ。「個性的な」とか「落ち着いたのある」という表現は当てはまらない。美しさとは縁遠く、当然絵にもならない。街並みを汚している要因はいくつかある。建築、電柱・電線、屋上、看板の順で現象と理由を考察する。

建築

どの写真も建築の大きさ、形態、色彩などがバラバラであり調和がない。写真 1、2 に見られる建物の上部は途中から柱が斜めになっている。これは道路斜線制限がそうさせたもので、道路の反対側から水平距離 1 に対し高さ 1.5 の角度（商業地域の場合）で斜めに削ぎ落としたような形になっている。

隣の建物が取壊され空き地になった場合、仕上げをしていない側面が剥き出しになる。この場合にはペンキで糊塗しているが、巨大な広告になったり、配管類が露出しているケースもあり救い難い。

写真 4 は立体駐車場である。なんとも無機的な存在であることか。

せっかくの街並み整備のチャンスを逃した例もある。写真 5 は道路用地を売却し残った敷地に立て直された建築群である。もし道路行政に街並みを作る意志があれば、建築誘導の制度と連動できたら、もうすこしまともな形に出来たのではないだろうか。

電柱・電線

電柱・電線は一層目立つ。都市活動に電力・通信は必要不可欠だが、いつまでこの架空方式が続くのだろうか。地下埋設方式は工事や維持管理に難点があると言われるが、それを当たり前としている国・都市ではどのように克服したのか。我が国の都市景観を汚している現状はどう償われるのだろうか。

一方、都心部の幹線街路では電線地中化が次第に成果を上げつつある。建築群の多様さや道路標識の大きさはともかく、全体としてスッキリした景観になっている（写真 6）。これで街路樹も伸び伸びと枝を張れるようになるし、建築側も外観デザインのし甲斐があるというものだ。

屋上

都市の景観は街路から眺めているだけではない。高層ビル窓から眺める景色も印象を強める。屋根は四方の立面に加えて「第五のファサード」と呼ばれるように、建築の顔の一部である。それが集合すれば都市の印象を特徴づける決め手ともなる。低層の住宅や町屋は「いらかの波」として屋根の重なりが絵になるが、ビルは陸屋根（平らな屋上）が普通である。平らであるから何でも置ける。水槽、物置、空調室外機、その他雑多なものが目に入る。屋上は隣のビルからは見えるが、オーナーや入居者には見えにくい不思議な場所である。（写真 7）

看板

看板（屋外広告）の全てが醜い訳ではない。街の賑わい、サイン、個性的表現などに看板が有効で街の個性に欠かせない場合もある。写真 8 は、交差点の角に位置する商店群と不釣り合いな大きさの看板、また写真 9 は、道路沿いに乱立した大型店舗群とそれぞれの看板である。いずれも説明は不要だろう。自社の利益のためには、あたり構わぬ自己表現がまかり通っているのが現実だ。

原因と改善方策

次に何故このような状況が許されて来たのか、その原因と背景及び改善の方策を考えてみる。

建築デザインに共通ルールを

それぞれの建築がある形に落ち着くのは、与えられた条件下で最も良い設計と判断されたからである。判断には主として 施主の意図・好み、法制度、設計者の力量の三点が関わっていると思われる。個々の敷地・施主はそれぞれの状況と目的を持って入るから、バラバラの建築が建つのは成り行きである。恐らく建築法令の定める限度内で最大の価値を生み出そうとしたはずだ。床面積、工事費、ネット率（賃貸料が取れる有効な床面積の比率）、外観などが主な関心事になる。個々の建築が最大価値を目指した結果、混乱した都市景観を形成したとも言える。

目に触れる都市の大部分は建築の重層的集合体と言える。ところが基本となる建築基準法は建築単体としての規制、それも火災・地震に対する安全を主目的とした体系になっている。また外観デザインへの関与は殆どないし、ましてやどのような街並みにすべきかについては、殆ど無力である。結果的には容積率、建蔽率、道路斜線、隣地斜線、住居系では日陰規制などが形を決める影響力を持ち、これらは逆におかしな形を強要することもある。

法令が全体イメージを誘導しないから、建築デザインは自由に満ちている。様式、色彩、仕上げ材料、開口部のリズム、いずれをとっても意匠を決めるのに公的な約束事は殆どない。さらに、建築許可の手続きである建築確認申請において美的要素は何の評価も加えられない。法令がその程度の力しか持たないとなれば、建築士の見識と力量に頼らざるを得ない。では設計者の美的力量はどのように保証されるのだろうか。

ビル建築を設計するのは一級建築士だが、その資格試験の設計課題では、隣地の用途については言葉で提示される程度で、隣接する建築との景観的調和は評価されない。また、立面図が求められても平面図・断面図との矛盾がなければ十分で、デザインセンスが合否に響くことはない。街並みの調和はおろか、建築の美しさの視点が無くても建築士は誕生するし、法的に何の障害もなく建物は建つのである。たまたま設計することになった建築家のセンスと、施主の好みでデザインの質を決めている。勿論立派な建築は多く存在するし、力量ある建築士も数多い。ここで述べているのは最低水準がどんなものであるかの傍証である。

このような状況に対し、都市景観上有効な手段はないのか。あまりに課題が大きすぎ答えは簡単に出ないが、二つ提案したい。一つは道路斜線制限を廃止して道路幅員に対し建築の高さを地域特性に応じて 1.5 倍、2.0 倍以下などとする制限に変えることである。勾配屋根を誘導したければ軒高と絶対高の両方を定めると効果的である。たとえ、デザインがバラバラでも高さが概ね揃うことで調和感が生まれる。歴史的に証明された手法だから、単調になる心配はない。理由は別にして建築の高さを 31m に制限した東京の丸の内、大阪の御堂筋は現在も代表的都市美として評価されている。

もう一つは色彩の調整である。一つの色に統一するのではなく、調和可能な一群の色の中からのみ選択する方法や、共通のアクセントカラーを採用することなどは合意が得られるのではないだろうか。歴史的街並みには瓦、木材、白壁という共通の素材・色彩があったが、現代の素材・工法はあまりに多様で自由なのだ。放縦の度が過ぎる建築デザインに最低限の共通ルールを加えることによって、全体の価値を高める方向に誤りはないと信じる。

電柱をなくし電線を地下に

架空方式が一般化している理由には、まずコストの安さ、工事と保守・復旧の便などが挙げられるが、

景観を汚している迷惑料ないし「社会コスト」を度外視しているし、工事・メンテナンスの容易さは、供給者側の論理と言われても仕方ない。

一方、都市の未成熟と社会的な容認も別な意味で現行方式の理由となっている。建築が次々に建て替わるような変化の大きい都市で恒久的なインフラを整備するのは無駄が大きい。逆に、都市が安定期を迎えた今こそ、無電柱化の好機である。社会的容認には、市民側があまり苦情を言わないこと、街づくりから見た方向づけの弱さの両面がある。市民、行政とも「見苦しい電線・電柱をなんとかしよう」と声を上げ、街づくりの目標のひとつに組み入れるべきだ。

電線の地下埋設による無電柱化は代表的方法である。水道・ガスなど他のユーティリティーと一緒に埋設する共同溝はその切札だが、予算・スペースに限界がある。より現実的な方式として推進されているのは、CCボックスと呼ばれる電線共同溝で、道路の付属物として歩道下に整備される。

面白い事例をひとつ紹介しよう。安上がりな地上・無電柱方式とも言えるやり方で、写真10の2階バルコニーの下をよく見ると、建物壁面を手掛かりとし目立たないように電線を通して（スペイン・レオンにて）。幹線以外で街路に沿って連続する都市型建築にはこのような手法も検討に値する。狭い道路では、変圧器置き場の提供など建築敷地側の協力が必要だ。

技術的工夫に加えて、電線の地下埋設促進に道路占用料の設定が影響を及ぼし得る。自治体の定める「道路占用料条例」には電線一本1m、電柱一本、地下管路1mなど対象別に一年間の占用料を定めている。空中の占用料に比べ地下を割安に設定することで無電柱化の支援になるのではないだろうか。

無電柱化促進には確たる方向づけと財源の確保が最重要である。環境保護の理由から削減される公共投資を振り向ければ、間違いなく都市市民に支持されるだろう。道路管理者と電力・通信会社の協力の下、電線の地下埋設へ向けた力強い動きを期待する。

屋上を緑に

都心建築の屋上を美しくするには緑化の推進や義務化が有効であると思われる。屋上の一定比率を緑にすることで、雑多な工作物が制限される。屋上緑化が進めば景観改善ばかりかヒートアイランドの緩和、野鳥の飛来など自然の回復にもつながる。

写真11（NEXT21 及び周辺）

既築建物の屋上に大きな荷重を加えることは困難と言われそうだが。そのような場合には施工可能な軽量で薄い緑化工法が既に開発されている。水を含んでも1㎡あたり30kg以下という荷重は屋上緑化の可能性を格段に広げる。駅プラットフォームの上屋を緑化できたら、見た目も爽やかだし、夏に電車を待つ間の暑さが随分と和らげられることだろう。

看板は累進制有料に

都道府県及び政令都市は、屋外広告物に関する条例を定めて看板類を制限している。しかし、住居系土地利用や特定の地区での制限・緩和が主で、普通の商業地域における制約は極めてゆるい。

屋外広告について「表現の自由」を言い出す人もいる。しかし、見たくない人には迷惑行為でもあるので、より強い制限とともに迷惑料として課税してもよいのではないか。かつて「広告税」は法定外市税として大阪でも実施されていたが現在は廃止されている。都市美化のツールとして、また自治体の収入源としても強化復活を期待する。何らかの非課税限度は必要だろうが、特に問題となる巨大なものは極端に高くなるよう累進性の課税が望まれる。

都市の賑わいと品格がどう調和を保ち得るのか、活発な議論が欲しいところである。

景観は都市文化の表れ

景観は目にみえる全てのものが集約された姿である。経済活動、価値判断、生活のありかた、コミュ

ニケーション、移動手段、環境への働きかけ、など一切合切の行為が形を取ったもので、都市文化そのものが表現されている。そして都市のイメージを形成する。

より良い都市づくりのために土地利用、道路・交通、建築、供給処理、公園、などとそれぞれの分野が努力してきた。立派な成果もあがって来た。しかし、平均的な姿は先に述べた程度なのだ。

景観の価値は環境や文化と同様に総合的な評価であり、縦割り型の分業施策や機能主義では対応し難い。美の価値を明らかにするには感性が尊重されなければならない。縦割りで対処し難い問題への対処には、強いリーダーシップと価値の共有が必要だ。

「ローマは一日にして成らず」を引用するまでもなく、立派な都市が形成されるには100年単位の時間が必要とされる。焦土からの復興と経済発展に半世紀、そろそろ本格都市への再整備の強い意志を固めても良いのではないか。それぞれの都市や地域の景観をどのような姿に導くべきか、コンセンサスを作る時期でもある。

ここで論じたのは、都市景観の積極的創出と言うより、景観を汚している要素の抽出と除去方策、改善方策に過ぎない。早くこの段階を卒業し、誇りの持てる都市美を作り上げる道筋を進みたいものである。